ウム・カイスにおけるローマ帝国から ビザンツ帝国への移行(その4)

―国士舘大学ヨルダン、ウム・カイス遺跡調査―

松本 健 国士舘大学名誉教授、国士舘大学 21 世紀アジア学部付属イラク古代文化研究所特別研究員

The Transition from Roman Empire to Byzantine Empire in Gadara/Umm Qais (4):

Excavation at Umm Qais, Jordan, Kokushikan University

MATSUMOTO, Ken Professor Emeritus, Kokushikan University

1. はじめに

ヨルダン北部の第2の都市イルビッドから西へ 20 km に位置するウム・カイス遺跡は北側はヤルムー ク川、そしてその背後にはゴラン高原があり、また北 西にはガリラヤ湖が広がっている。また西側には広大 な台地が広がり、更にその西側にはヨルダン渓谷が南 北に走っている。この渓谷はアフリカ大陸から続いて、 死海地溝帯として知られ、その地溝帯の底にはヨルダ ン川が流れ、ウム・カイスの南側にはワディアラブ川 が、ヨルダン川へ流れ込む。現在はこの涸河は堰き止 められ、ダムが造られている。これらのヨルダン川、 ヤルムーク川、アラブ川には新石器時代からの遺跡も 分布しており、豊かな水、肥沃な土地、また特にヤル ムーク川、アラブ川のそばには温泉が湧き出ているこ ともあり、古代より豊かな環境であったことを示して いる。同時に東の砂漠地帯、西の東地中海沿岸と、北 のシリア、南のペトラ更にエジプトとの十字路に渡っ て、交易がなされており、その重要な拠点となってい た。

2. H17cave 地下室の発掘調査

ウム・カイスにおいてはローマンハウス建物遺構 (Bil.4)の H17 グリッドに位置する地下室が発掘され、そこから多数の赤色スリップのかかった土器片が発掘された。ここではその形式分類を試みた。その結果、これらの形式は赤色のスリップ、スタンプによる装飾、高台や大き目のプレートが載ったユニークな形式が採られている。この様式は African red slip ware(紀元後1~3世紀)と呼ばれ、北アフリカのチュニジアや東

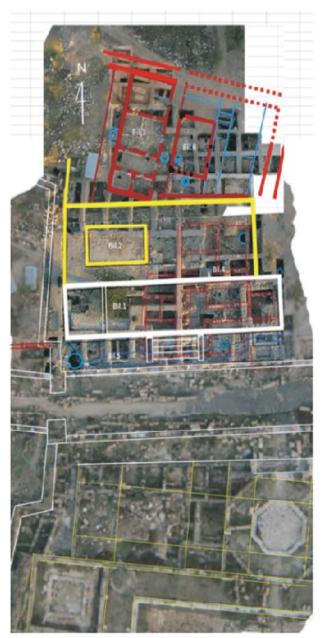
部アフリカなどで作られてローマ帝国世界へ輸出されていた。それらの年代はC14年代測定によると

- 1. Umm Qais Beta371850 charred material, 1800 ± 30 BP, AD130 to 260
- 2. Umm Qais Beta371851 charred material 1870 ± 30 BP, AD70 to 230
- 3. Umm Qais Beta371852 charred material 1800 ± 30 BP, AD130 to 260

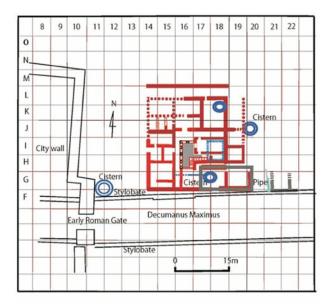
という結果が出ており、土器形式からも後期ローマ時代の2~3世紀のものと思われる。ウム・カイスにおいてこのローマンハウス邸宅に住んでいた人はこのような高価な African red slip ware を使った食生活があったことがこれらの食器から想像される。

この地下室は本来初期ローマ時代には地下墓としてヘレニズムから初期ローマ時代に掘削され利用されていたと思われる。現在の発掘された地下水槽の壁などに残る窪みは初期ローマ時代のF10に見られる地下墓として掘り込まれた時の奥壁の痕跡と思われる。それがこのF17caveにもその痕跡が見られることから地下墓がさらに拡大されて5m×4mの地下室或いは地下水槽に利用された。

地下室そのものは、この建物 Bil.4 が放棄され、入り口が塞がれたときから誰も開けていない地下室であり、新しい時代の特にビザンツ時代の遺物は混入していない、いわばローマ時代の一定期間だけ使用された遺物であり、それが地下室に埋まっていたと言える。そういう意味で時代判定の貴重な試料となりうる。



ウム・カイス、国士舘大学発掘調査区



Schematic plan of Roman House Umm Qais, 2012, Kokushikan University

Fig. 2 ローマンハウスと H17 地下室

3. African red slip ware の形式分類

Fig. 3 碗 Bowl with everted rim and ring base 粘土質の胎土で全体に薄くて軽い深めの碗である。口縁が外 反している。外側底には高台が低いがリング状に2本付けて ある。洗練された器形と質である。前面に赤いスリップが施 されている。



Fig. 4 盆 Flat Plate with high stand

蓋とも、台とも考えられる。ただ平らな面が少し中心部に向 かって盛り上がっていることで物を置くには不安定である。 全面に赤いスリップが施されており、胎土は粘土質である。

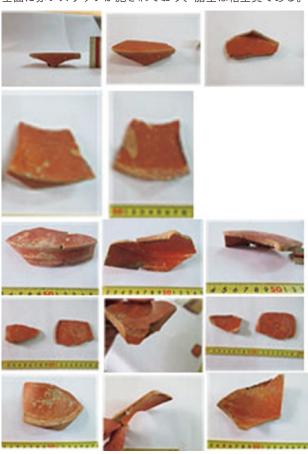
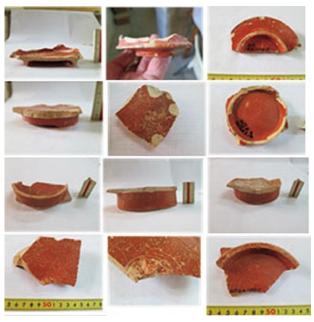


Fig. 5 盆 Plate with high stand

高い高台の上に平らな面を作り、その端に垂直に器壁を数セ ンチ立ち上げている。この台のような器に、果物類が或いは 小さい杯が置かれてあったのだろか。さらに底部の中心部に モチーフをスタンプのようなもので押している。また円状に 連続に楔形のような文様を施している場合もある。



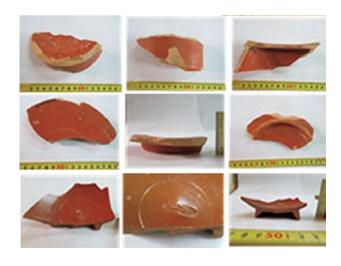


Fig. 6 碗 Bowl 全体に丸みをもち、全面に赤色のスリップが施された器の胴 部で、口縁部は竜骨形になっている場合がある。

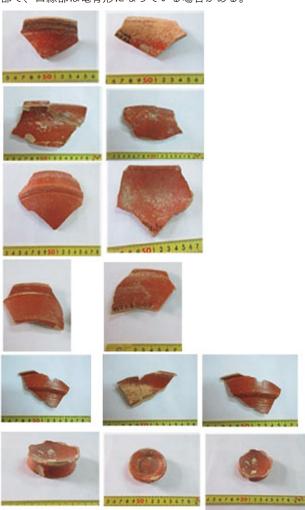


Fig. 7 壺 Jug

外側は赤色のスリップが施されているが、内面にはスリップ が掛けられていないところから、これらは Jug の底部と思 われる。

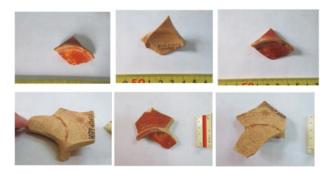


Fig. 8 水差し Jug with one handle and high stand 外側前面に赤色スリップが施された水差しである。



4. あとがき

今回 African red slip ware だけの紹介であったが、 このほかの通常の土器の分類、胎土分析なども進めて、 総合的に総括していく予定である。

松本健(2016)「第2章国士舘大学発掘調査団による ヨルダン、ウム・カイス遺跡の初期ローマ五市門地区 H17 地下室出土の土器分類の試み」『国士舘大学文化 遺産研究プロジェクト』15~24頁の資料に新たに資 料を加えて発表した。